

南会津 のうりんニュース



今月の写真：「ペレットストーブ」

着々とますます暖かさに春の訪れを心待ちにする気持ちと裏腹に、スギ花粉飛来時期が近づいています。

無花粉スギが開発され、全国の一部の地域では普及されつつありますが、スギ花粉に悩まされる者にとっては、早急に普及されることを願うのみです。

写真は、環境にやさしいペレットストーブです。

今月の内容：

- 今月のトピックス
 - ・木質ペレットストーブを設置しました!!
 - ・南会津地域集落営農リーダー研修会を開催!!
 - ・西会津町の「冬の農業」を視察!!
 - ・寒さで甘くなった野菜の味を比較!!
- この人を知りたい
羽田 正さん
- 農林事務所からお知らせ
- 今月のコラム

平成20年2月12日発行 福島県南会津農林事務所

今月のトピックス

暖かさを体感できます。 木質ペレットストーブを設置しました!!

去る1月16日、ペレットストーブを県合同庁舎玄関ホールに設置しました。南会津郡の県有施設では初めてのことで。

「ペレットストーブ」とは、何物で、何を目的に設置したのか？簡単に説明します。

①「何物」についてですが、ペレットとは製材端材や間伐等の残材を粉碎→調湿→圧縮して作った粒状の固形燃料のことです。このペレットを燃料とするストーブをペレットストーブといいます。

今回、設置したストーブは、いわき市の民間企業が開発したのですが、カナダ、イタリアやオーストリア製のストーブも輸入されています。ここ数年国産ストーブの開発が進んでおり、質感の良いものも市販されるようになってきました。

ペレットストーブの価格ですが、18~80万円と様々です。オープン機能、アラームやリモコン付きもあります。ちなみに今回設置したストーブの価格は38万円です。同じ能力のFF式石油ファンヒーターは20万円弱ですが、環境にやさしい点でペレットストーブを選ぶ方が増えています。

②「何を目的」についてですが、ペレットストーブの実物を県民の皆さんに見ていただき暖かさを体感してもらうことが目的です。

ペレットストーブは、石油などの化石燃料を使用したストーブに比べ、木質燃料なので燃焼時に発生す

るCO₂は樹林が成長する過程で吸収・固定したもので、トータルのCO₂を増やさない効果があります。つまり、ペレットストーブの利用は木材の有効利用と地球温暖化の防止に貢献できるものなのです。



さて、温暖化を防止する方法を「森林・木材」の観点から3点提案します。

- ①天然林の保全、人工林の間伐・更新
特に人工林の手入れが大切です。間伐を実施して森林を健全な状態に保つことやCO₂の吸収力が高いといわれる20~30年生の森林面積を常に確保することが重要です。
- ②木材の長期間利用
木材を住宅や家具としてより多くしかもできるだけ長く利用することです。その間、木材は炭素を固定しています。
- ③木材を燃料として利用
薪ボイラー、薪ストーブやペレットストーブなどにより木質燃料を使うことで灯油などの消費を抑えることとなります。

さあ、皆さんもペレットストーブをきっかけに地球温暖化防止について考えてみましょう。

皆さんができる範囲でCO₂を出さない工夫をすることにより、未来の生活環境を確保できるはずです。

(森林林業部)

南会津地域

集落営農リーダー研修会を開催!!

去る1月16日に、南会津町御蔵入交流館において集落営農リーダー研修会を開催し、30集落のリーダー、関係機関など約120名の参加がありました。

まず始めに、民俗研究家の結城登美雄さんから「みんなの力を合わせて地域を再生させよう!」と題して基調講演をいただきました。結城さんは10年にわたり東北の農山漁村を歩きながら、住民を主体に地域を足下から見直す「地元学」を提唱されており、この講演では、全国各地の事例紹介をとおして「むらづくりの原点」をユーモアたっぷりにお話しいただきました。特に、沖縄の方言で、



基調講演の様子

「ゆんたく(おしゃべりすること)」、「ゆいまーる(助け合い)」がこれからの村づくりに欠かせない事だと提案されました。

その後、「みんなで集落の将来を考えよう!」と題して、各町ごとの班に分かれて、集落リーダーが集落営農を進める上での問題点、解決方法などについて積極的な情報交換・議論が行われました。

参加された集落リーダーからは、「力を合わせて地域を再生するには原点(初心)に戻ることを知らされた」、「米作農業が危機に陥っており、集落営農等の必要性が身にしみて感じられた」、「小さな村にもまだまだ希望があることを実感した」等の感想が多く聞かれ、集落リーダーの資質向上につながった有意義な研修会となりました。

(農業普及部)



情報交換の様子

西会津町の「冬の農業」を視察!!

地方における新たな農業活動への参考とするために、去る1月24日に農業者を中心に26名で、同様な気象条件を持つ西会津町の「冬の農業(冬期間のミネラル栽培)」を視察研修しました。

西会津町では、平成16年度よりミネラル野菜栽培及び冬期間の農業を振興するためにパイプハウスリース事業に取り組んでいます。振興にあっては、冬の農業啓発・栽培技術・販売戦略など、西会津町が中心となり、生産者とJAとが連携して取り組んでおり、主に無加温によるハウス軟白栽培ネギ(フラワーネットと遮光ポリフィルムを利用して土寄せを行わない栽培)と寒じめハウレンソウハウス栽培(無加温)が行われています。



写真上 雪のつもるパイプハウス
写真下 ハウス軟白ネギの様子

当日はあいにく低気圧による猛吹雪の中での視察研修となりましたが、気温・積雪深などの気象条件が共通する西会津町での取り組みは、当地方の「冬の農業」を検討するのに大変参考となる事例でした。

(地域農林企画室、農業振興部、農業普及部)

寒さで甘くなった野菜の味を比較!!

一般的にハクサイやダイコンなどの野菜は、雪室などに貯蔵すると「甘く」と言われますが、その優位性に着目し、南会津地方における独自の新たな商品化に向けて南会津農林事務所・南会津地方振興局では調査・分析に取り組んでいるところです。

雪室等貯蔵野菜の商品化のためには、市販野菜との差別化を図る必要があるため、現在までに、県農業総合センターと共同で糖分やビタミン



雪室等に保存しておいたハクサイ

成分などの化学分析を行ってきていますが、それとは別に、人間の味覚による比較を行うために、去る1月23日に食味官能試験を実施しました。

雪室等に貯蔵したハクサイ・ダイコン・ネギの3点と、それぞれの市販野菜とを「生」「ゆで」「調理」の3通りで食味しました。なお、「調理」は、ダイコンは「ブリ大根」、ハクサイは「ハクサイとベーコンのスープ」、ネギは「焼きネギ」で、下郷町食生活改善推進員の皆さんの協力により野菜の味が分かるように薄味で調理いただきました。

雪室等貯蔵野菜は、食感が柔らかく、甘味があるように感じた品目もありましたが、具体的な結果については、化学分析と併せて検討していきます。

(地域農林企画室)

この人を知りたい

南会津から遊休農地をなくしたい!!

(南会津町田島地域 羽田 正さん)

今回は、異業種(建設業)から農業に参入し、そば栽培からそば屋まで手がける羽田正さんを紹介いたします。

羽田さんは、福島市出身で、昭和39年建設会社勤務と同時に南会津郡内に来られ、昭和49年から田島町(現、南会津町)に居住されております。昭和57年に同町に(株)福南建設を設立し、以来、建設業を通じ南会津地域の発展に寄与されてきました。

羽田さんの農業との関わりは、実家が専業農家であることから農業に対する思い入れが強く、荒れ始めていた農地を見て、「何とかしなくては!」と思ったことがきっかけでした。

平成5年頃から建設業の傍ら約12haでそばの作業受託や栽培を行い、農地が荒れるのを防いできました。平成16年には農業生産法人(有)F. K. ファームを地域の農業者2名と共に立ち上げ、そば生産を本格的に開始し、地域農業の担い手としての位置づけを明確にしました。

現在は田島地域中荒井地区と水無地区の遊休農



そば製粉所と羽田さん

地も含め、42haの農地を再生し、大規模そば栽培を実践されています。経営的には、そばの生産から玄そば、そば粉の加工販売を行い、平成19年には、新たに、福島県が育成したそば新品種「会津のかおり」の種子も生産されています。また、同年6月からは中荒井地区直売所の運営、さらに同年10月からは同直売所に併設したそば屋を開店されるなど、地産地消及び高付加価値型農業の確立に向け積極的に取り組まれています。

今後の経営展開については、「高齢化・米価の下落等により今後水田の遊休化が一層懸念される。経営的にペイできるかわからないが、新たに水稻の作業受託や栽培も行い、地域の人の手助けになれば。」と力強く話され、さらに「今年はさらに忙しくなり、大好きなゴルフも多少我慢せざるを得ないかも…」と笑顔で話されていました。

羽田さんのますますのご活躍を期待しております。
(農業普及部)



コンバインでそば刈りする羽田さん

農林事務所からお知らせ

「ふくしま食と農の絆づくり運動」のロゴマーク、キャッチコピー決定!!

関係団体、市町村、県では、消費者と農業者が相互理解を深め、交流を拡大することにより「食」・「農」・「環境」を一体のものとして、本県農業の持続的な発展を目指す「ふくしま食と農の絆づくり運動」を平成19年よりスタートしています。

この「ふくしま食と農の絆づくり運動」をより多くの県民の皆様に理解していただくため、ロゴマー

ク、キャッチコピーが作成されました。(次ページ参照)

■ロゴマーク

全体的には、ふくしまの「ふ」の文字をイメージしています。「食」をイメージする「箸」、「農」をイメージする「稲穂」、農業者の皆さんと消費者の皆さんが無尽大に手をつなぐことをイメージ

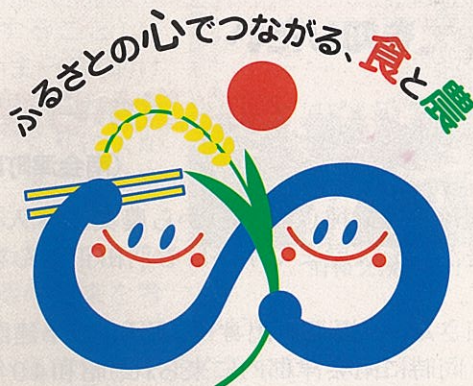
(4ページに続く)

(3ページから続く)

した「∞」を組み合わせ、お互いが価値観を共有し、相互理解を深め、交流を拡大し、両者の絆をつなぎながら、福島県の農業が持続的に発展していくことを象徴しています。

■キャッチコピー

私たちのふるさと、ふくしまの「食」と「農」を大事にしていこうという気持ちを表現しており、福島県の農業を持続的に発展させるために、消費者の相互理解や、価値観の共有等が必要であることを端的に表現しています。



ふくしま食と農の絆づくり運動

今月のコラム

命の重み

年 始めのNHKスペシャルで2夜連続「新型インフルエンザ」について放映がありました。第1夜はドラマ「感染爆発～パンデミック・フルー」、第2夜は調査報告「新型インフルエンザの恐怖」でした。

新型インフルエンザは、鳥インフルエンザが突然変異を起こし人から人へ感染するようになることです。鳥インフルエンザは国内でもあの宮崎県やお隣の茨城県で発生していますが、通常は人に感染することはありません。しかし、インドネシアでは家族間で感染が認められ、重い肺炎で感染者のほとんどが亡くなった事例が紹介されていました。解説によれば「家族に特別な因子があり感染したのではないか」とのことでした。ウィルスの変異は時間とともに進み、まもなく多くの人間に感染する感染爆発が起こるのは間近に迫った問題なのです。

第1夜では、日本海の寒村に漂着した木造船に乗っていた人間から感染し、やがて東京で感染爆発が起こるストーリーです。都内の病院では自分達への感染を恐れ患者の受け入れを拒否するが、主人公の医者が使命として受け入れることを進言

する。

殺到する患者であふれかえる病院、やがて数台しかない人工呼吸器を使って誰を助けるのか、主人公は大きな決断を迫られるのです。親しくしていた老人か？出産を間近に控えた女性か？そして老人から人工呼吸器が外されました。

第2夜では、米国における発生時の対策が紹介されていました。米国では当初インフルエンザに罹ると重症化しやすい高齢者に人工呼吸器の使用を考えていましたが、このことについての報道がなされると、世論が高まり若い世代に使用することに改めたとのことでした。

国内において発生した場合、対策行動計画を見ると人工呼吸器の使用について記述したものは見当たりませんが、投薬の順番はあるようです。誰を優先して助けるのか、命の選択をもとめられる時がくるかもしれません。私は50代…？

人工呼吸器を外さなければならない事態が起こらないよう全世界の英知を結集して新型インフルエンザの感染を防いで欲しいと願うのみです。

(農村整備部長 豊田 裕)



お問い合わせ先はこちら

〒967-0004

福島県南会津郡南会津町田島字根小屋甲4277-1

南会津農林事務所 地域農林企画室

電話 0241-62-5866 FAX 0241-62-5256

電子メール minamiaizu.nourin@pref.fukushima.jp

ホームページ <http://www.pref.fukushima.jp/norin-minamiaidu/>



ふくしま食と農の絆づくり運動

みなさんのご意見・ご感想をお寄せください。



この広報誌は再生紙とSOY(大豆油)インキを使用しています。